一、内田家文書について

一、内田家文書について

千葉県文書館古文書調査員加藤　時男

⑴調査の経緯

平成二十六（二〇一四）年九月、茂原市箕輪の神明家文書が茂原市立美術館・郷土資料館に寄贈され、調査されることになった。

この神明家文書は予ねて（昭和六〇年頃）からその調査を依頼していた文書であったが、諸般の事情により実現せず、漸く今回実現したものである。

神明家はこの地で医院を経営していたが、平成十二年、神明和夫氏が逝去し、後継者がなく医院は廃業された。その後神明家は無住となり、家屋内部の整理中である。茂原市が文書類の寄贈を受けたときは、不用家具類の焼却処分中であり、これらの文書類も奇跡的に受け入れることが出来たものである。

神明家は、近世には上総国長柄郡箕輪村の名主・組頭など村役人を務め、その下知書（任命書）や年貢皆済目録など箕輪村の地方（農村）文書が多く存在する。また菩提寺円蔵寺の檀家惣代を務めたことから寺院文書も多い。

全体的には、神明家文書は近代文書が多く、特に明治期の当主神明久作に関する文書は特徴的である。久作は明治七年、設立当初の千葉師範学校を卒業し、その後、郡役所や県庁の役人として教育関係を中心に千葉県の教育行政を担ってきた。役人としては、明治三十年の東葛飾郡長を最後に退任しているが、この間の千葉県政に係わる貴重な史料も多い。その後は地元に戻り、長生地域の教育行政に大きく寄与している。特に中等教育の拠点となる明治三十四年の私立大成館（現長生高校）の成立には千葉弥次馬（号、天夢）と協力して中心的な役割を担った。その関係史料である千葉弥次馬、高橋喜惣治、安川寛三郎の書簡なども多く、貴重である。

これら神明家文書と共に大きなブリキの衣装ケース三箱に保管された文書も発見された。これが東金市新宿の内田家文書であった。神明家文書全体の調査報告書は、平成二十七年七月、茂原市教育委員会により刊行されているので参照されたい。

そもそも内田家文書が茂原市の神明家に所蔵されていたのは何故であろうか。その理由には次のような事情

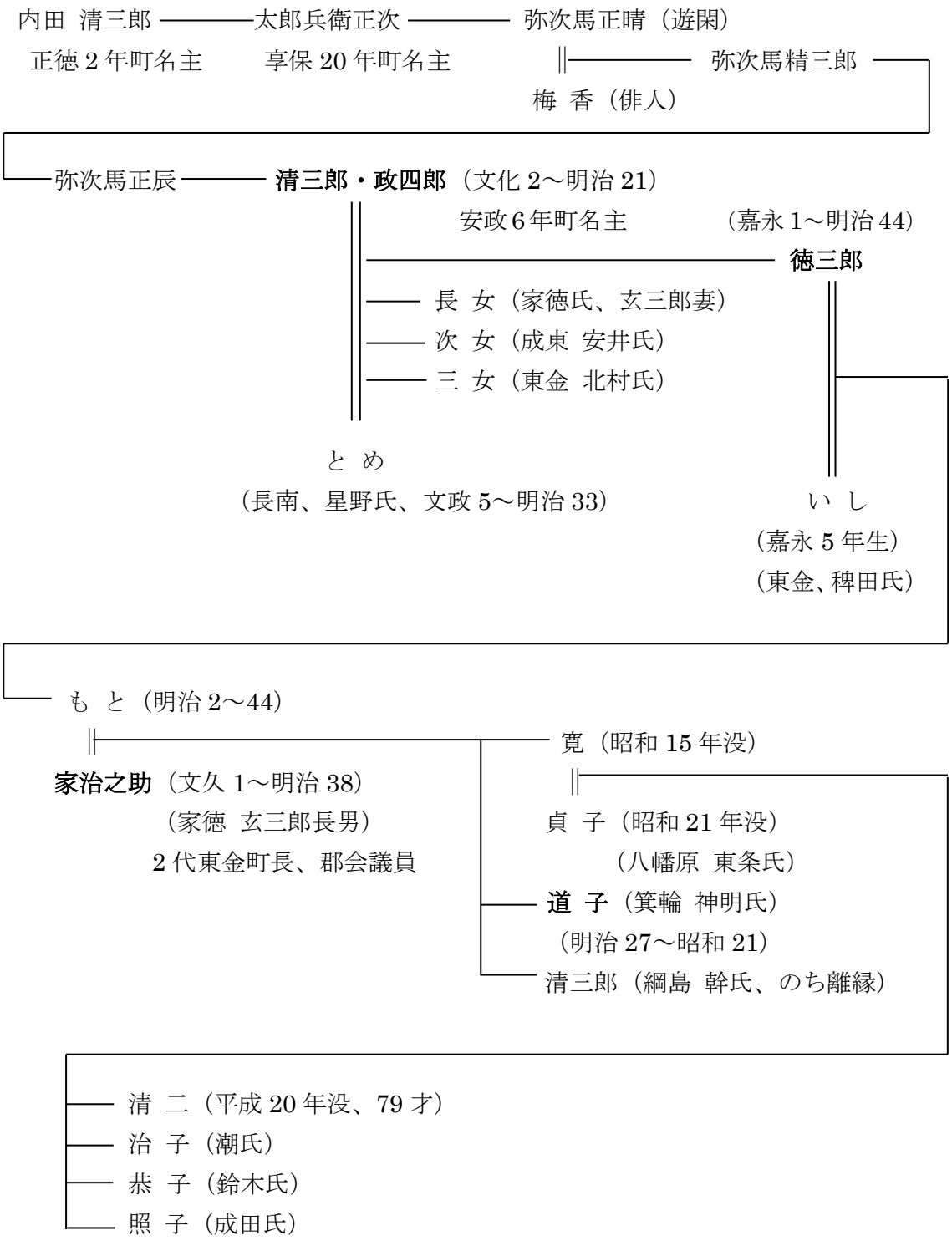
があった。

現在、内田家は東金に住んでおらず、諸般の事情により昭和前期に東金から移住している。これより前、明治末期に内田家の女性　道子が神明家に嫁いでおり（神明久作の子静夫の妻となっている）、実家の古文書群を継承したと推察される。内田（神明）道子は東金高等女学校第一回の卒業生であり、神明家文書には東金高女関係の文書も含まれている。ちなみに道子の父内田家治之助は明治二十五年から二十七年にかけて第二代東金町長を務め、郡会議員を歴任し、明治三十六年には内田女学校を設立し、東金高等女学校創立以前の女子教育にも功績があった。

なお、内田家文書発見に至るには次のような経緯もあった。

昭和六十年頃、筆者が茂原市八幡原の旧家東条　健家文書の調査を行った際に、その一部に近世東金随一の豪商内田家文書が含まれていた。御当主に聞いたところ、伯母が内田家に嫁いでおり、内田家が東金から移住する際に預り、その後返却したが一部残ったものであろうとのことであった。そこで当時の当主内田清二氏（横浜在住）に連絡したところ、同氏宅には古文書類は全くないとのことであった。或は、近くの親類、茂原市箕輪の神明家にあるかも知れないとのことで、以来神明家に接触し続けたものであり、ようやく今回の調査につながったものである。当時、東条　健家で発見された内田家文書は『茂原の古文書史料集第三集　茂原市古文書目録集』（平成八年、茂原市立図書館発行）に採録済みである。参考のため、この調査報告書にも再録した。

[内田家略系譜]


内田 清三郎
正徳 2 年町名主
太郎兵衛正次
享保 20 年町名主
弥次馬正晴（遊閑）
弥次馬精三郎
梅 香（俳人）
弥次馬正辰
清三郎・政四郎（文化 2～明治 21）
安政 6 年町名主
（嘉永 1～明治 44）
徳三郎
長 女（家徳氏、玄三郎妻）
次 女（成東 安井氏）
三 女（東金 北村氏）
と め
（長南、星野氏、文政 5～明治 33）
い し
（嘉永 5 年生）
（東金、稗田氏）
も と（明治 2～44）
家治之助（文久 1～明治 38）
（家徳 玄三郎長男）
2 代東金町長、郡会議員
寛（昭和 15 年没）
貞 子（昭和 21 年没）
（八幡原 東条氏）
道 子（箕輪 神明氏）
（明治 27～昭和 21）
清三郎（綱島 幹氏、のち離縁）
清 二（平成 20 年没、79 才）
治 子（潮氏）
恭 子（鈴木氏）
照 子（成田氏）

⑵文書の概要と意義

内田家は江戸時代、東金地域（福島藩分領）随一の豪商であり、町名主も務めている。これらの文書群は今まで知られていないものであり、江戸時代の東金を知る貴重な史料である。特に東金の中心部と田間村、二又村の史料は既刊の『東金市史』でも決定的に不足しており、この内田家文書は空白部分をかなり埋めてくれるものである。

次に、内田家文書の概要と意義を紹介する。

一　文書は衣装ケース三箱に収蔵されており、総点数約三千点の新出文書である。年代的には寛文（江戸前半）から明治期にかけてのものである。目録は衣装ケース三箱にA～Cの符号を付して、それぞれ袋詰をして作成した。

ニ　内田家は福島（板倉）藩の御用達であり、分領（東金、田間、二又村）の地方支配にも深く関係しており、藩から名字帯刀、五人扶持を与えられている。『東金市史』（通史篇）には「五人扶持、米二十二俵二斗、内田清三郎」と記されているが、このとき他の有力者大多和三左衛門、大野伝兵衛、杉谷弥左衛門などは全て「二人扶持、九俵」であった。

三　内田家は福島藩の財政を掌握しており、福島市史にとっても貴重な史料群である。ちなみに福島市の近世藩政史料はかなり不足しているようである。

四　東金町、田間村、二又村の年貢皆済目録など今まで未発見の地方（農村）文書もある。

五　内田家は本漸寺の有力檀家であり、宗教史料もある。なかには東金御殿の小西正法寺移築に関係すると思われる書簡（神明家文書　い5・い6）などもある。

六　史料は東金地域だけでなく、成東（結城藩）や大網など近隣の大名、旗本などの財政史料もある。